若者のひろば

幸せを呼ぶ魔法

加藤悠汰（群馬県立太田フレックス高等学校卒業）

「痛いよ、やめてよ。」そう言葉に出すことすら出来ませんでした。

私は中学生の時、ひどいいじめに遭っていました。何人もに殴られることもありました。無視や、私に関するひそひそ話も頻繁にありました。中学の時はずっと、そんないじめに、耐えて耐えて耐え抜く毎日でした。

私は元来、笑うことが好きでした。面白いことを言って、人を笑わせることも得意でした。その原点には旅行があります。家族が旅行好きであり、私が幼少の頃から頻繁に連れて行ってくれました。それは非常に楽しく、自然と笑顔になりました。家族旅行が私に笑顔を植え付けてくれました。ですから私は、殴られている時でさえ、顔を引きつらせながらも、笑顔を作ってしまいました。殴っている人は、ふざけたやつだ、もう一発殴ってやろう、そう思ったでしょうか？

中学卒業後、私は県立高校全日制に入学しました。しかしそこでもいじめがあり、一年生の六月から不登校になり、十月には退学してしまいました。

実は私には夢がありました。それは、将来、旅行会社に就職することです。しかし高校を卒業しなければ、その夢も実現できません。私は退学後、そんなモヤモヤした気持ちを抱えながら、アルバイトをして過ごしていました。その期間は長期にわたりました。翌年も高校を再受験する気にはなれませんでした。しかし、退学後も高校の担任の先生やスクールカウンセラーの先生は、私を見捨てず、連絡をくれていました。ある時、スクールカウンセラーの先生が「太田フレックス高校っていう、少人数で授業が受けられる高校があるんだけど、合っているんじゃない？受けてみたら？」と言ってくれました。私は自分に問いかけました。「高校に入学しても、きちんと通えるのか？学校に行くから傷つくんだ。だったら家に引きこもっていればいいじゃないか。」でも私には向上心もありました。その向上心を奮い立たせてくれたのは、先生の優しい笑顔でした。私は答えました。「はい。受けてみます。」しばらく忘れていた笑顔を、取り戻した瞬間でした。

私は昨年四月、太田フレックス高校のⅢ部に入学しました。親しい友人もできました。中学不登校ながらも、勉強を絶やさなかったらしく、意外と勉強が得意なＫ君。挫折を経験したのに、いつも元気いっぱいでスポーツ好きなＴ君。皆、私が笑顔で話しかけた結果、親しくなった友人達です。先生方も優しく、笑顔いっぱいで接してくれ、今は安心感に包まれ生活できています。ですから、揺らぎかけていた信念が戻ってきました。そう、笑顔は、幸せを呼ぶ魔法なのです。

今私は、この学校で初めて、夢のスタートラインに立てたと感じています。そこで未来設計図を描いてみました。人間関係で人一倍、悩み苦しみ、傷ついてきた私が、本当に人と関わる旅行の仕事をやっていけるのか、という不安はいつもあります。ですから高校生活では、特にコミュニケーション能力を養いたいと思い、授業や学校行事の中で、積極的に会話をし、自分以外の人の考え方を感じ取る努力をしてきました。今後の高校生活でも、様々なタイプの人との付き合いの中から、それを学びたいと思っています。

もちろん学業も大切です。地理、歴史はもちろん、外国のお客様に対応するためには、英語力も身につけなければなりません。本格的には卒業後に、専門学校で訓練するにしても、その土台となる部分は高校の学習で身につけておきたいです。気の置けない友人、丁寧に教えて下さる先生方の中でなら、しっかり学んでいく自信が持てました。将来は、旅行業務取扱管理者試験に合格し、自信を持って仕事に励めるように、準備したいと考えています。

繰り返します。私にとって笑顔は、幸せを呼ぶ魔法です。それを教えてくれた今までの環境、人々すべてに感謝します。あの中学校時代、殴

られた時の笑顔さえ、私が私である証拠だったのです。その原点である旅行を通して、多くの方々に、この幸せを呼ぶ魔法を拡散できたら最高だと思います。夢を実現するためには、大変なことがたくさんあります。しかしどんな時も、その困難に笑顔で魔法をかけ、幸せを掴み取ります。

これは、加藤悠汰さんが高校２年の時に開催された「生活体験発表大会」で発表したもので、県大会で準優勝しました。そして３年時には優勝しました。
彼は某高校中退後、フォーラムに相談に来ました。その後、太田フレックス高校に入学し、今年３月に卒業しましたが、相談に来た時以来久しぶりに出会った彼は、別人のように自信に満ちた青年になっていました。加藤さんの成長する力とフレックス高校の「教育力」に改めて感動です。　（伊田志保・瀧口典子記）

教育相談部会報告

3 月 28 日、親子連れが前橋公園の満開の桜を楽しむ中、フォーラムでは教育相談部会が開かれました。学習支援の取り組みとスクールカウンセラーの仕事について報告します。

学習支援活動

さまざまな相談を受ける中で学習支援は継続的に行われてきました。3 年前に始まった「母親」への高卒認定試験受験への支援は新型コロナ感染症の爆発的な拡大を機に中断を余儀なくされました。コロナ禍は育児に追われる環境で学習を始めようとするお母さんにも大きな影響を与えました。

外国人への教育支援に取り組む NPO 法人 G コミュニティーの要請を受けて昨年８月から始まった女性の高校受験のための学習支援にはフォーラムから二人が参加しました。日本に来てから 8 ヶ月の 17 歳の女性は日本語学習の支援を受けてきましたが日常会話の力は十分とは言えません。母国バングラデシュで学んだ数学や英語の力もまた日本の高校受験に対応するには足りません。そんな中で倉林が英語を、船橋が数学を担当し、手探りでコミュニケーションを深めながら週に１回ずつの支援をつづけてきました。３月、女性の努力が報われ、自転車で通える定時制高校に合格しました。いっしょに市役所に行って、学校に提出する住民票を発行してもらいましたが、その時の日本語は堂々としていました。しかし彼女にとって、高校の授業に適応することはさらに大きな試練になります。私たちの支援はこれからも続きます。

スクールカウンセラーの仕事

教員を退職後、臨床心理士の資格を取得してスクールカウンセラーとして活動している小林一郎さんにお話を聞きました。

県内の小中学校、大学など６つの現場で仕事をされている小林さんは児童生徒、大学生と向き合って、主に不登校の悩みに耳を傾けています。私たちは、小林さんがどんなアドバイスをするのかが気になりますが、「基本的には本人が自分で進むべき道を見いだすことを支援する」のが仕事だと言います。そのためにさまざまな取り組みを試みるとのこと。「傾聴」の姿勢は特に大切で、この言葉には想像以上の意味がありそうです。「なぜ」「どうして」と尋ねがちな私たちには重く響く言葉でした。得意なピアノ演奏がその扉を開くこともあると笑顔で語りました。また、本人をとりまくさまざまな環境に着目し、広い視野で問題をとらえることの必要性も強調しました。

《文責：倉林　順一》